

海辺のカプセル

霜月 透子

透明な球体は振るとカラカラ音がした。カプセルを両手で握り締め、ひねるようにして開けたら、勢いあまって指輪が砂浜に落ちた。拾い上げてみれば、見覚えのあるおもちゃの指輪だった。君と行った夏祭りの出店で、射的だから投げ輪だかをして取ったものだ。

君はまだこんなものを持っていたのか。半ばあきれ、半ば甘い痛みを覚えつつ、僕はおもちゃの指輪をジーンズのポケットに押し込んだ。空のカプセルは海に投げた。重さのないカプセルは思ったよりも手前で落下し、打ち寄せる波に浮かんだ。しばらく砂浜を行ったり来たりしていたが、やがてほかの泡と混ざり合っ

て消えた。
みかん色の夕日にいくつもの鳥々の影が浮かび上がっている。みるみる風が冷たくなってくる。

日が沈みきる前に僕は海に背を向けた。

翌日もまた海に向かう。島内はどこにいても潮が香る。

ブロック塀に挟まれた細い路地を抜けると、黄昏の海が広がっていた。沈みゆく日の光が波頭を輝かせている。その海を背にしてプレハブが建っている。駄菓子屋だ。客も店主もいない駄菓子屋が波打ち際に佇んでいる。

この駄菓子屋のことは君の話で知った。

故郷の浜に不思議な駄菓子屋があると言っていた。それは海を背に建っていて、満潮でも沈むことはなく、干潮でも海から離れることはなく、どんなときも必ず波打ち際に建っていたという。

不思議なことはまだあって、お金の代わりに貝殻で支払うそうだ。店主がいるにはいるが、誰もがその場を離れると顔を思い出せないとか。

僕はその話を楽しく聞いた。子供らしいごっこ遊びの一種だと思ったからだ。中でもカプセルトイの話は特に興味深かった。

望むものが出る……かもしれない、というものだ。

「かもしれないってうまい保険をかけたな」

僕が感心しながら笑うと、君は「そうじゃないの」とむきになって訂正した。「望むものは必ず入っている伝説のカプセルトイなの。ただそれが出るとは限らないってこと。何種類か入っていて、そのうちのどれが出てくるかわからないの。カプセルトイってそういうものでしょう？」

「うん、そうかそうか、望むものが出るかもしれないし出ないかもしれないな」

「もお。信じてないでしょ」

「信じてる信じてる」

「うそ。そうやってあなたが言葉を重ねるのは適当な返事をしている時なんだから」

背後で大きな音がして、耳の奥に残る君の笑い声は打ち消された。

巨大な石を動かすような音に振り向くと、ブロック塀が扉のように閉まるどころだった。左右のブロック塀が接すると同時に、塀の内側にあった民家も消えた。巨大な鏡を立てかけたかのようにどこまでも砂浜が続いている。

いつものことなので焦りはない。帰り道は、駄菓子屋で買い物をすれば再び現れる。第一、急いで帰る場所もない。君のいない世界に僕の帰る場所などない。

ひとけはなく、打ち寄せる波の音だけが聞こえる。この浜だけでなく、この小さな島のどこにも人はいない。

君の故郷の島はずっと前に廃村になったことは聞いていた。それ以来、無人島だと言うから、どんなに荒れ果てた光景を目にすることになるのかと思ったが、案外きれいだった。浜の近くの集落は確かに三、四十年前で時が止まったままの光景ではあるが、家屋が朽ちていることもなく、雑草が生い茂っていることもなかった。誰か管理する者でもいるのだろうか。ほんの今し方まで島民が日々の暮らしを送っていて、たまたま揃って昼寝でも始めてしまったかのような穏やかな光景だった。

駄菓子屋にも人はいない。客はもちろんのこと、記憶に残らない顔を持つという店主もいない。

それでも店奥の日めくりカレンダーはちゃんと一日だけ進んでいた。

駄菓子屋の並ぶ店内には入らず、店先のカプセルトイの前に立つ。

これのために僕はここまで来た。この島の、この浜に。

君は伝説のカプセルトイだなんて言っていたけど、どこにでもあるやつにか見えない。第一、カプセルトイなんて現代のものだ。伝説になるには新しすぎる。

伝説には新しすぎるが、今どきのものにしては古すぎた。プラスチックの大きな回し手ではないし、コイン投入口もない。僕が子供のころに遊んだ型だ。握りにくい金属の回転レバーで、コインはレバーについている歯車に挟み込み、回転させると一緒に回って投入されるようになっていた。ただしこれはコインの代わりに貝殻を使う。貝殻ならそこらじゅうにいくらでも散らばっている。

名も知らぬ二枚貝の片割れをコインメックの回転板に挟んだ。レバーを回すと、ギギギともガガガとも聞こえるいかにも苦しそうな音を立てた。貝殻が飲み込まれると、カプセルが取り出し口に落ちてきた。

カプセルを開けると、君の声が聞こえてきた。懐かしい調子外れの歌声。

君の歌声はいつも音程がめちゃくちゃでなんの曲なのかさっぱりわからない。なのに君は目を閉じていかにも気持ちよさそうに歌うものだから、本来どういふ曲なのかなんてことはどうでもよくなった。

君の歌。ただそれだけの幸せな歌。

今日はとてもいいものを引き当てた気がする。けれど、君そのものじゃない。

君のいない世界はからっぽだ。どれだけたくさんの人や物や出来事があったも、君がいなければなにもないのと同じだ。失われたものの大きさに愕然とする。いずれ近いうちに僕までからっぽになりそうだ。いや、もうすでにからっぽなのだろう。

その中身を詰め込みたくて、君の故郷へとやってきたようなものだ。

実を言うと、島に着いた当初、カプセルトイの話は忘れていた。というより、君の思い出話を信じていなかった。だからこの駄菓子屋を見つけたときはほんとうに驚いた。

潮の満ち引きに合わせて移動する駄菓子屋なんて見たことがない。砂浜にそ

んなものがあるのも、海に背を向けているのも妙だ。

それでもカプセルトイを試してみたのは、君の話が少しも怖そうではなく楽しい思い出として語られていたことと、なにより、僕には引き当てたい「望むもの」があったからだ。

僕の望むもの。それは君だ。

けれどもまだ君そのものは出てこない。

とはいえ、出てくるものが君の持ち物ばかりだったところに比べれば、歌声が出てきたのは君そのものに近づいているとも言える。

店奥の日めくりカレンダーでは十日以上たっていた。

二十日、三十日、と日々が過ぎていく中で、明日への希望を繋いでいるのはいつか君そのものが出るかもしれないカプセルトイだけだった。

一日一回だけ回せるカプセルトイ。

その後も形あるものが出たり、形ないものが出たりした。

あるときは、水族館のチケットの半券が出てきた。日付の印字は薄れていて読めなかったけれど、僕にはわかった。初デートのときのものだ。こんなものまでとってあるなんて、嬉しいやら恥ずかしいやらで、僕はひとり砂浜を駆け回った。

またあるときは、くすくすと静かな笑い声が入っていた。それはとても君っぽくて、思わず僕は声を上げて泣いた。誰もいないのいいことに、思いっきり泣いた。ただ不思議と涙は一粒も零れなかった。

思えば君はいつも笑っていた。入院中の病室でさえも。

君は喧嘩中でも朝出かけるときには笑顔だった。僕が君を思い出すとき、いつだって一番新しい記憶は笑顔であってほしいからと言って。

その言葉通り、最後の記憶は病室での君の笑顔だ。

あと一日で五十日という日、君の一部を引き当てた。カプセルの中には艶やかな髪の毛が渦巻き状に納められていた。撫でるとひんやりなめらかだった。君の頭を撫でた感触がよみがえる。黄昏の海辺で僕は、君の髪を握ったまま動けなかった。

懐かしさや愛おしさよりも恐怖が勝った。髪は、片手で握るには多いほどの量

だったからだ。

僕はここにきてようやく思い至る。

この小さなカプセルで君そのものを引き当てるということは、一旦ばらされた君を再構築することなのではないか。もしかしたら、明日のカプセルには指や耳が入っているかもしれない。それは、ここではない場所にいる君の一部が欠けていくということ。

望んではいけない。

君のいない世界に君を呼び寄せれば、また一緒にいられると思っていた。けど、だめだ。まだ生きている君をこの世界に呼ぶことなどできない。

病室のベッドに横たわる僕の手を握り、目を潤ませながらも笑顔を見せてくれた君をこちらに呼ぶことなどできない。

僕は四十九個目の空のカプセルを海に投げた。カプセルは波間に見え隠れして、やがて泡になって消えた。

視線を上げれば、いくつもの島々の彼方に、大きな満月が昇ろうとしていた。白く淡く光る月は天頂目指して昇るにつれ、みるみる大きくなっていく。ほどなくして僕を覆うように月の縁が投網のように降ってきた。砂浜や海面に接した月の縁は徐々に絞られ、ついには僕をまあるく包み込んだ。

球体の中で僕は膝を抱え丸くなる。月の膜越しに海鳴りが聞こえる。ゆらゆら揺れる。

海に漂う球体の中で微睡んでどのくらい経ったのだろう。

ギギギともガガガとも聞こえるいかにも苦しそうな音がした。レバーが回される音だ。この僕を、誰かが望んだのだ。

ころりとどこかに落ちた。

僕を包み込んでいた球体に裂け目が出てきて、細い光が差し込んできた。

そして僕は、ゆっくりと出ていった。

(了)